

大学生の「自己物語」の語用論的機能

*久 保 順 也

Pragmatic Functions of “Narratives of Self” of University Students.

KUBO Junya

Abstract

This study reports how “Narratives of Self” affect the listener’s impression in interpersonal communication. The Positive “Narratives of Self” were presented to university students and their reactions were measured by means of a paper-based research. As the result, their impressions were partially different by their sexes or their own self-perceptions; Subjects whose self-perception was positive tended to think of the person who narrated the positive “Narrative of Self” as friendly. And male subjects tended to think of the person who narrated the positive “Narrative of Self” as unreliable. As the conclusion, the significance of this study and further tasks were discussed.

Key words : Narrative of Self (自己物語)
Pragmatic function (語用論的機能)
Mediating self (媒介的自己)

1. 問題と目的

「自己とは何か」という問いは、臨床心理学的援助が必要な者だけではなく、日常を健康に暮らしている者（特に青年期の者）まで広く一般に共有されている問題であると思われる。この「自己」に関する認識として、「自己」は個人内に閉じて存在するという捉え方がこれまで一般に共有されてきたが、現在では社会構成主義の視点から改めて「自己」が捉え直されるようになり、その構造および形成プロセスは社会的文脈の影響を強く受けるという社会的要因を考慮した捉え方が定着しつつある (Gergen, 1994 ; Gergen, 1999)。このような捉え方によると、自己を個人内で完結する心的活動現象とみなすことがもはや困難であり、「安定的統合的実体としての自己」から、「周囲の外界と相互作用しながら変化し続ける自己」「社会的状況か

ら切り離しえない自己」あるいは「我と他の関係においてそこに存在する自己」へと、自己それ自体への考え方が変わりつつある (遠藤, 1999)。この社会構成主義の視点は、既存の心理学だけではなく臨床心理学領域にも大きな影響を及ぼしており、特に現代の家族療法やナラティブ・アプローチの実践にもその影響が及んでいる (若島・佐藤・三澤, 2002)。そもそも、個人を対象とした心理療法から家族システムへと治療の視点を移した家族療法においては、これまで「自己」というものが大きなテーマとして扱われてこなかった。しかし、家族療法の成立に大きな影響を与えた文化人類学者ベイトソン (Bateson, 1972) は、アルコール依存症について考察する中で、「自己」あるいは「精神」は自分自身で統制可能であるという前提から離れた新しい認識論を展開しており、家族療法領域においても新たな視点から「自己」を捉え直そうとする素地

* 学校教育講座

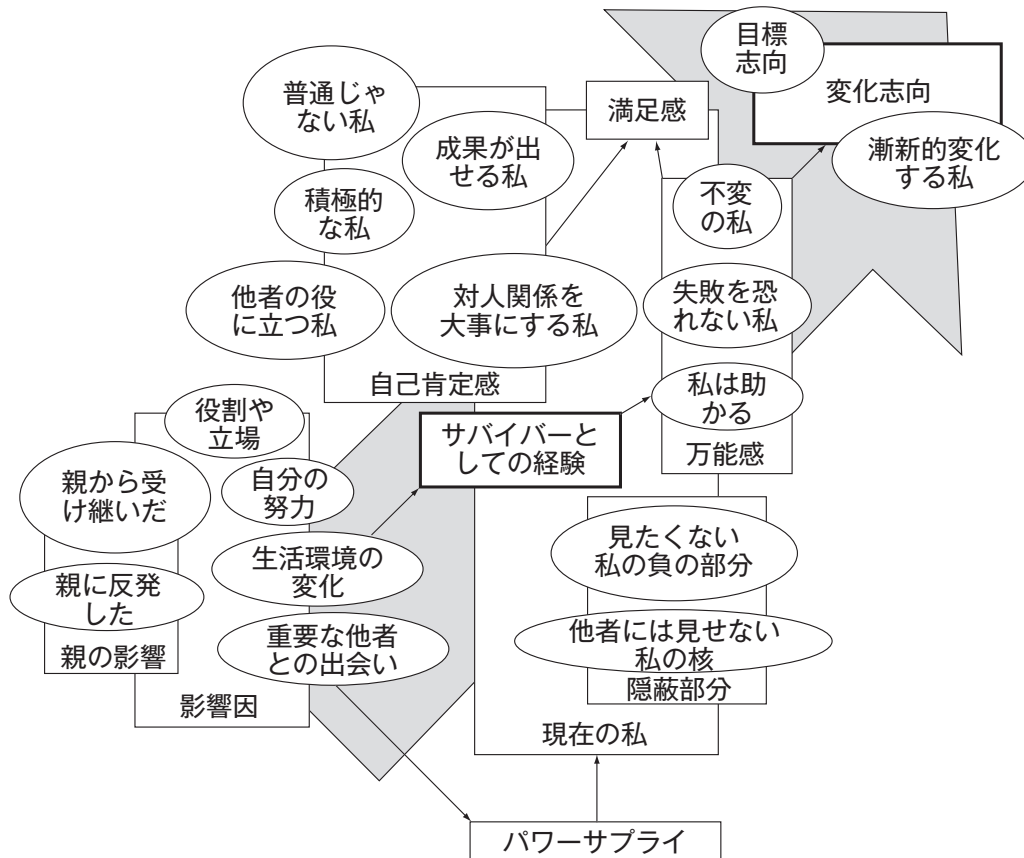


Figure 1 久保 (2006b) の結果図

はあったものと思われる。また、家族療法およびナラティブ・アプローチにおける実践は、社会学など他領域における自己論にも影響を与えている。たとえば浅野 (2001) は、家族療法およびナラティブ・アプローチの視点を援用しつつ、「物語としての自己」とも呼ぶべき自己論を展開している。それによれば、「自己」とは他者との間で語り語られる「物語」であるが、それは一つの統合された物語としてのみ存在するのではなく、多様な物語が併存する形で存在する。このことから、いつでもどこでも自分は同じ自分であり続けるという「自己同一性」は否定され、状況に応じて異なる性質を帯びる自己という考え方が提示されている。また、同様の視点から、久保 (2006a) は「媒介的自己」という概念を提案している。これは、「自己」についての語り、つまり自己物語を通して個人同士がコミュニケーションする際に、「自己」は個人と個人の間で媒介的役割を果たしていると考えられる捉え方であるが、そもそも互いに「自己」の存在を前提としないと個人と個人がコミュニケーションできないため、「自己物語」によって社会的関係性が維持されうるとい

う、自己および自己物語の語用論的機能に着目しようとするものである。このように、自己物語を他者に向けて語ることを通して、「自己」が形成されるという捉え方は、「物語としての自己」および「媒介的自己」の両者に共通した視点である。

この自己物語の構造を明らかにすることを目的として、久保 (2006b) は、自分自身のことを肯定的に捉えている肯定的自己像保持者に焦点を当て、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (木下, 2003) を用いてモデル化を試み、結果図としてまとめている (Figure 1)。この結果図からは、肯定的自己像保持者が自分自身を過去から未来への時の流れの中にある存在と見ており、また過去には必ずしも良い事ばかりではなかったがそれを無事くぐり抜けてきたという「サバイバーとしての経験」を持っており、さらに失敗や変化を恐れずに未来に進もうとする「変化志向」の側面があることが分かる。このようにして見ると、肯定的自己物語が「前進する語り」の構造 (Gergen, 1999) となっていることが伺える。さらに久保 (2007) では、久保 (2006b) のモデルの中でも重要なカテゴ

リーとされた「サバイバーとしての経験」「肯定的自己像」「変化志向」の3つのカテゴリーを取り上げて量的検討を加えている。それによれば、肯定的自己像高群においては、過去受容尺度および変化志向尺度と肯定的自己像尺度得点の間に弱い正の相関が見られ、モデルを支持する結果が得られている。しかし、この構造を持つ自己物語が対人場面においてどのような機能を持つのかは未だ検討されてこなかった。

そこで本研究では、久保（2006b）のモデルで示された構造を持つ「肯定的自己物語」が、対人場面においてどのような語用論的機能を持つのかを明らかにすることを目的とし、質問紙を用いた調査によって、その対人場面における影響を探索する。その際に、「自己物語」を提示される側である聞き手側の要因についても検討する。

具体的には、久保（2006b）のモデルを元に制作した「肯定的自己物語」を提示された調査対象者が、この物語の語り手にどのような印象を抱くのかを各尺度を用いて測定する。また、聞き手側の要因として、聞き手自身の「自己」の捉え方、つまり自分のことを肯定的に捉えているかどうか（肯定的自己像の保持）を取り上げる。聞き手側の自己意識が、他者による「自己物語」の提示に際してどのような影響を与えるのかを検討する。

さらに補足として、久保（2007）で使用された「サバイバーとしての経験」および「変化志向」に関する指標を取り上げ、他の指標との関連を検討する。

2. 方法

<対象者>

公立大学生および私立大学生153名を対象に授業時に質問紙を実施した。質問紙の実施時期は、2008年1月および同年7月から9月であった。

<質問紙の構成>

質問紙の構成は以下の通りであった。

(1) 肯定的自己像に関する尺度（計51項目）

久保（2006b, 2007）に従い、以下の5つの尺度を採用した。

①自己肯定意識尺度（平石, 1990）のうち対自己領

域の「自己受容」に関する4項目：

具体的な項目は、「自分なりの個性を大切にしている」「私には自分なりの人生があってもいいと思う」などである。回答方法は、1（あてはまらない）～5（あてはまる）の5件法であった。

②自尊感情尺度（山本・松井・山成, 1982）10項目：

具体的な項目は、「少なくとも人並みには、価値のある人間である」「色々な良い素質をもっている」などである。回答方法は、1（あてはまらない）～5（あてはまる）の5件法であった。

③信頼感尺度（天貝, 1995）のうち「自分への信頼」に関する6項目：

具体的な項目は、「私は、自分自身を、ある程度は信頼できる」「私は自分の人生に対し、何とかやっつけていけそうな気がする」などである。回答方法は、1（全くあてはまらない）～6（非常によくあてはまる）の6件法であった。

④矢田部ギルフォード性格検査のうち「劣等感」に関する10項目：

具体的な項目は、「失敗しやしないかいつも不安である」「なかなか決心がつかず機会を失うことが多い」などである。回答方法は、1（あてはまらない）～5（あてはまる）の5件法であった。

⑤自己嫌悪感尺度（水間, 1996）21項目：

具体的な項目は、「自分が全くダメだと思ふ事がある」「自分がいやになる事がある」などである。回答方法は、1（まったくあてはまらない）～5（非常にあてはまる）の5件法であった。

(2) 変化志向に関する尺度

⑥時間的展望体験尺度（白井, 1994）のうち「目標指向性（5項目）」：

具体的な項目は、「私には、だいたいの将来計画がある」「将来のために考えて今から準備していることがある」などである。回答方法は、1（あてはまらない）～5（あてはまる）の5件法であった。

(3) サバイバーとしての経験に関する尺度

⑦時間的展望体験尺度（白井, 1994）のうち「過去受容（4項目）」に関する項目：

具体的な項目は、「私は、自分の過去を受け入れることができる」「過去のことはあまり思い出したくない

い(逆転項目)」などである。回答方法は、1(あてはまらない)～5(あてはまる)の5件法であった。

(4) 肯定的な自己物語の語用論的効果を測定する尺度

⑧林(1982)による特性形容詞尺度(20対):

具体的な項目は、「積極的な-消極的な」「人のわるい-人のよい」などの形容詞対であり、それぞれ

を両極とした7件法による回答であった。

この尺度を用いて、提示された肯定的な自己物語を語る人物(以下ターゲット)について印象評定をするよう調査対象者に求めた。この「肯定的な自己物語」は、久保(2006b)で得られた結果図を元に作成されている。提示された自己物語をTable 1に示した。

Table 1 ターゲットが語る「肯定的な自己物語」

私は、中学生の頃から部活を一生懸命取り組んで来ました。もともとは、親がその部活に入部していたこともあり、子どもの頃からあこがれていた部活でした。

高校生になっても同じ部活に入部しましたが、レギュラーになることができませんでした。それですごく落ち込みました。高校の部活はレベルが高くて、自分の能力では、ついて行くのがやっとでした。一時は部活を辞めることも考えました。

でも、顧問の先生との出会いが私を変えるきっかけになりました。顧問の先生は、私を支えてくれて応援してくれました。また、私は部活の友達とも積極的にコミュニケーションを持って、たくさん一緒に時間を過ごしました。そして努力して練習して、3年生の時にはレギュラーとして試合に出られるようになりました。

この経験を通して、私はやればできるんだと思うようになりました。失敗してもいいからチャレンジすることが大事だと思うようになりました。

今は、こんな自分に満足しています。でも、いつまでも変わらないのではなく、目標に向かって、これからもどんどん変わっていく自分でいたいと思います。

3. 結果

回収された質問紙のうち、有効回答数は132部(男27名、女105名、平均年齢20.9歳、SD=0.77)であった。以下、これらの有効回答を元に分析を行った。

<尺度の作成>

上記の①から⑤各尺度の得点について主成分分析を行ったところ、第1主成分までの累積寄与率が63.4%となり、1因子構造であることが確認された。固有ベクトルを見ると、尺度①②③が正の値を、また尺度④⑤が負の値を示していることから、主成分は「肯定的自己像の保持に関する指標」であると解釈された。さらに回答者ごとに主成分得点を算出し、この得点を「肯定的自己像尺度」とした。

肯定的自己物語を語る人物の印象評定に用いた特性形容詞尺度の評定結果を元に、因子分析(主因子法、promax回転)を行った。因子分析の過程で、因子負荷量が.40未満であったり、2つ以上の因子にわたっ

て因子負荷量が.40以上であった3項目(6「心のひろい-心のせまい」、12「沈んだ-うきうきした」、15「分別のある-無分別な」)を除いて再度因子分析(主因子法、promax回転)を行ったところ、5つの因子が抽出された(Table 2)。各形容詞対の意味から、それぞれの因子の意味について解釈し、第1因子は「自信欠如」、第2因子は「親和的」、第3因子は「信頼性欠如」、第4因子は「優しさ」、第5因子は「回避的」と命名した。それぞれの因子の α 係数は、第1因子.83、第2因子.68、第3因子.75、第4因子.71、第5因子.71であり、それぞれ十分な信頼性があると判断された。

Table 2 特性形容詞尺度の因子分析結果（主因子法・promax回転）

項目	平均	S D	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5
F 1：自信欠如 ($\alpha = .83$)							
13. 卑屈な-堂々とした	3.20	1.24	0.86	0.15	0.00	-0.15	-0.04
1. 消極的-積極的	2.77	1.29	0.61	-0.21	-0.01	0.12	0.11
17. 意欲的な-無気力な	5.69	1.23	-0.51	0.23	-0.02	0.11	-0.12
18. 自信のある-自信のない	4.95	1.39	-0.80	-0.13	0.07	0.03	0.02
F 2：親和的 ($\alpha = .68$)							
2. 人の良い-人の悪い	5.65	0.87	0.05	0.46	-0.05	-0.09	-0.10
5. かわいらしい-にこらしい	4.80	1.09	0.19	0.41	0.10	0.40	-0.20
16. 親しみにくい-親しみやすい	2.81	1.24	0.11	-0.49	-0.06	-0.30	0.08
3. なまいきな-なまいきでない	2.90	1.51	-0.03	-0.68	-0.06	-0.03	-0.16
F 3：信頼性欠如 ($\alpha = .75$)							
11. 軽薄な-厚重な	3.55	1.09	-0.07	0.15	0.78	-0.24	0.11
8. 責任感のない-責任感のある	3.54	1.49	0.28	-0.35	0.46	0.27	-0.09
9. 慎重な-軽率な	4.57	1.17	0.08	-0.03	-0.81	0.13	0.09
F 4：優しさ ($\alpha = .71$)							
14. 感じの良い-感じの悪い	5.36	1.22	-0.29	0.29	0.04	0.53	0.12
20. 親切な-不親切な	4.73	1.00	-0.05	0.04	-0.09	0.53	0.08
19. 短気な-気長な	3.32	1.20	0.04	0.17	0.23	-0.61	0.02
F 5：回避的 ($\alpha = .71$)							
10. 恥ずかしがりの-恥知らずの	4.24	0.86	0.23	0.38	-0.14	0.04	0.74
4. 近づきたい-ひとなつこい	3.20	1.29	-0.25	-0.30	0.01	-0.06	0.67
7. 社交的な-非社交的な	5.27	1.29	-0.18	0.13	-0.14	-0.06	-0.67
因子負荷量の二乗和			4.30	4.25	2.95	3.93	2.94
累積寄与率 (%)			33.69	43.67	49.62	52.95	55.42

※注：表中の因子負荷量は、各形容詞対の左側の語へのあてはまり度合いを示す。

<平均値の比較>

性別の要因を比較するため、各尺度の得点について男女間でt検定を行ったところ、第3因子のみ有意差が見られたため ($t(130) = 3.25, p < .01$)、以下の分析では性別の要因も含めて分析を行った。

また、肯定的自己像尺度の平均値よりも得点が高い者を肯定的自己像高群、平均値よりも得点が高い者を肯定的自己像低群に分類した。

性別および肯定的自己像尺度の高低各群別の各尺度得点および因子得点を Table 3 に示した。

Table 3 各尺度得点・因子得点の平均値と標準偏差

性別	肯定的自己像	N	第1因子		第2因子		第3因子		第4因子		第5因子		過去受容		変化志向	
			M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
男	低	10	.10	.98	-.20	.92	.56	.66	.15	1.13	-.48	1.11	12.00	3.80	15.30	4.52
	高	17	.01	1.07	.04	.78	.45	.86	-.34	.87	.04	.72	14.00	3.84	17.06	4.75
	総和	27	.04	1.02	-.05	.82	.49	.78	-.16	.98	-.16	.90	13.26	3.88	16.41	4.66
女	低	57	.06	.97	-.20	.91	-.07	.90	-.12	.91	.12	.99	13.95	3.45	16.11	4.61
	高	48	-.10	.85	.27	.90	-.19	.90	.23	.80	-.06	.81	12.56	4.20	16.98	3.82
	総和	105	-.01	.92	.01	.93	-.13	.90	.04	.87	.04	.91	13.31	3.85	16.50	4.27
全体	低	67	.07	.97	-.20	.91	.02	.90	-.08	.94	.03	1.02	13.66	3.54	15.99	4.57
	高	65	-.07	.91	.21	.87	-.02	.93	.08	.85	-.03	.78	12.94	4.13	17.00	4.05
	総和	132	.00	.94	.00	.91	.00	.91	.00	.90	.00	.91	13.30	3.84	16.48	4.33

次に、性別および肯定的自己像尺度の高低各群における各尺度得点・各因子得点の差について検討するため、二元配置の分散分析を行った。

第1因子（自信欠如）は、性別および肯定的自己像高低いずれの要因においても有意差がみられなかった。

第2因子（親和的）は、肯定的自己像高低の主効果が10%水準で有意傾向であった（ $F(1,128) = 3.25$ 、 $p < .10$ ）。グラフをFigure 2に示す。つまり、肯定的自己像高群は低群よりもターゲットを親和的と捉えていた。

第3因子（信頼性欠如）は、性別の主効果が1%水準で有意であった（ $F(1,128) = 10.50$ 、 $p < .01$ ）。グラフをFigure 3に示す。つまり、男性は女性よりもターゲットのことを信頼できない存在と捉えていた。

第4因子（優しさ）は、交互作用が5%水準で有意であった（ $F(1,128) = 4.64$ 、 $p < .05$ ）。単純主効果について見ると、肯定的自己像高群において、性別の単純主効果が5%水準で有意であった（ $F(1,128) = 5.27$ 、 $p < .05$ ）。つまり、肯定的自己像高群においては、男性よりも女性の方がターゲットを優しいと捉えていた。また、女性において、肯定的自己像高低の単純主効果が5%水準で有意であった（ $F(1,128) = 4.12$ 、 $p < .05$ ）。つまり、女性においては、低群よりも高群の方がターゲットを優しいと捉えていた。グラフをFigure 4に示す。

第5因子（回避的）は、交互作用が10%水準で有意傾向であった（ $F(1,128) = 3.07$ 、 $p < .10$ ）。単純主効果について見ると、肯定的自己像低群において、性別の

単純主効果が10%水準で有意傾向であった（ $F(1,128) = 3.82$ 、 $p < .10$ ）。つまり、肯定的自己像低群においては、男性よりも女性の方がターゲットを回避的と捉えていた。一方、性別の要因においては、肯定的自己像高低の単純主効果は有意ではなかった。グラフをFigure 5に示す。

続いて、過去受容に関する尺度について見ると、交互作用が10%水準で有意傾向であった（ $F(1,128) = 3.07$ 、 $p < .10$ ）。単純主効果について見ると、女性において、肯定的自己像高低の単純主効果が10%水準で有意傾向であった（ $F(1,128) = 3.44$ 、 $p < .10$ ）。つまり、女性においては、高群よりも低群の方が過去を受容している傾向が強かった。グラフをFigure 6に示す。

変化志向に関する尺度では、性別および肯定的自己像高低いずれの要因においても有意差がみられなかった。

大学生の「自己物語」の語用論的機能

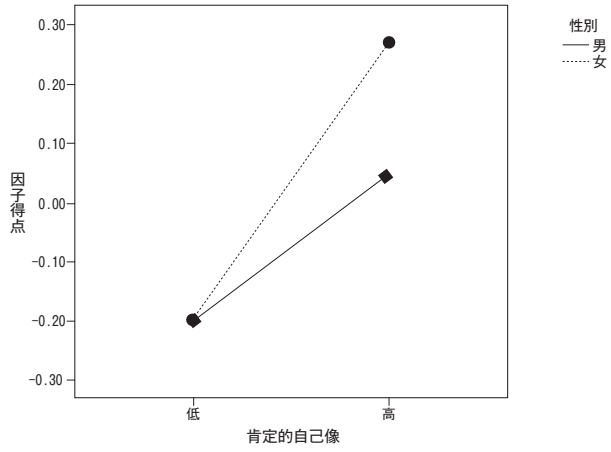


Figure 2 第2因子（亲和的）因子得点の平均值

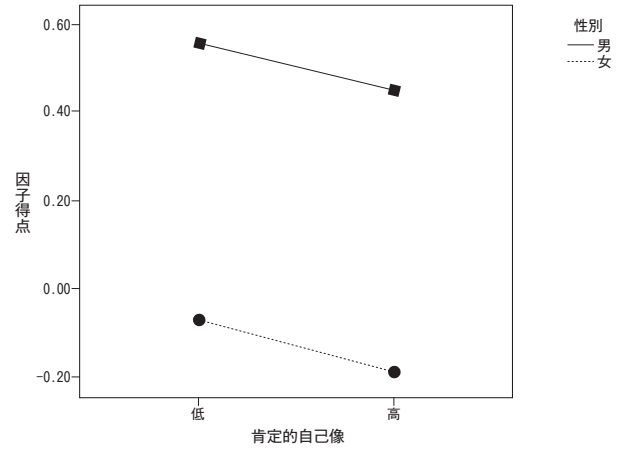


Figure 3 第3因子（信頼性欠如）因子得点の平均值

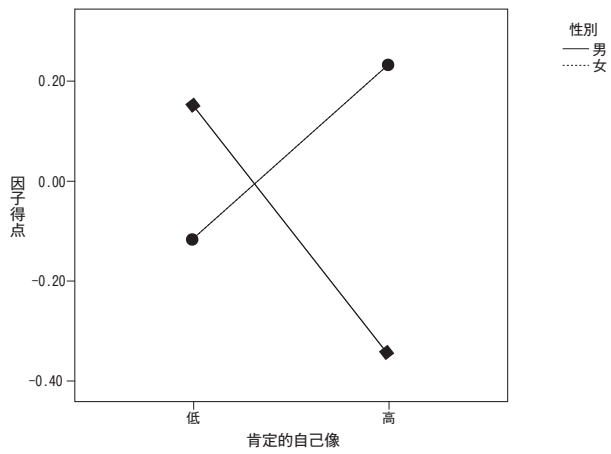


Figure 4 第4因子（優しさ）因子得点の平均值

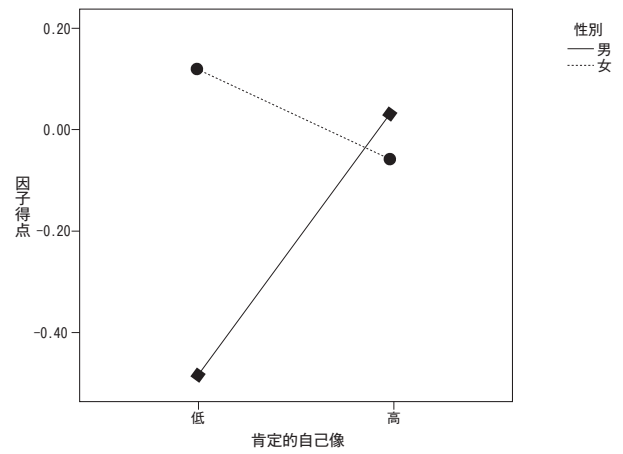


Figure 5 第5因子（回避的）因子得点の平均值

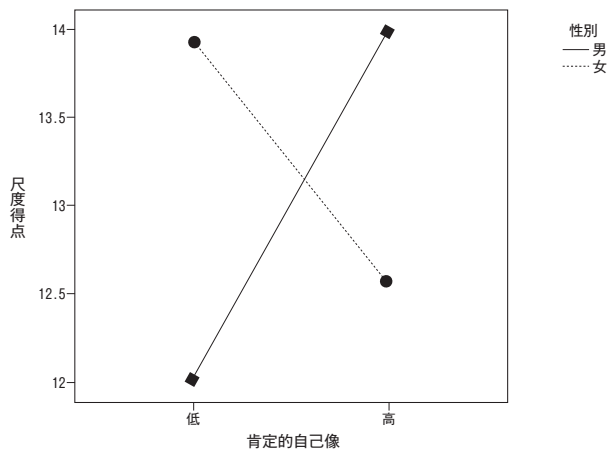


Figure 6 過去受容に関する得点の平均值

4. 考察

<聞き手側の要因について>

肯定的な自己物語の語り手が聞き手に与える印象は、親和的印象や優しさ、または信頼性や回避的印象において、聞き手側の性別や肯定的自己像の保持の度合いによって異なることが明らかとなった。

つまり、肯定的自己像について見ると、高群は低群よりもターゲットを親和的と捉えており、さらに高群においては男性よりも女性の方がターゲットを優しいと捉えていた。逆に肯定的自己像低群においては男性よりも女性の方がターゲットを回避的と捉えていた。

また、性別の要因について見ると、男性は女性よりもターゲットのことを信頼できない存在と捉えていた。女性においては、低群よりも高群の方がターゲットを優しいと捉えていた。

聞き手側の肯定的自己像保持の度合いが、肯定的自己物語およびその語り手の捉え方に影響を及ぼすことは類似説（例えば Byrne & Nelson, 1965）からも説明できる。つまり、肯定的自己像の保持の度合いが高い者は、他者の語る肯定的自己物語をそのまま「肯定的」に受け止め、その語り手に良い印象を抱く。自分と同じように肯定的自己像を持つ者は、自分との類似性が高いと認知され、行動を予測しやすい対象であると認知された結果、それが好印象につながったのかもしれない。逆に肯定的自己像の保持の度合いが低い者は、語り手をネガティブに捉えた可能性がある。本研究では、肯定的自己像低群の女性が、ターゲットを「回避的」と捉えていた現象がこれに該当するが、他の指標（例えば第3因子「信頼性欠如」）では同様の結果が得られておらず、今後の検討が必要である。

性別の要因は肯定的自己像保持の要因とは別に作用していた。本研究に参加した男性の調査対象者は数が少なかったため十分な検討ができたとは言えないものの、例えば肯定的自己物語の語り手を「回避的」と否定的に捉える傾向は男性の方が強いという、女性と男性とで異なる傾向が確認された。この点に関して、本研究における肯定的自己物語の語り手を「自己宣伝（self-promotion）」あるいは「自己高揚的呈示」による印象形成のための方略と捉え直すと、その効果は男性においては部分的には有効ではなかったといえる。この理由として、自己呈示における「謙遜」の効果が

関連している可能性がある。一般に日本文化において、自己の能力を披瀝することは自惚れで不誠実な印象を与えるため、自分の持つ能力や成功体験については公言せず控えておく「謙遜」の方略を用いた方が他者に好意的な印象を抱かせることが可能である。自己高揚的な自己呈示とも捉えられる「肯定的自己物語」がどのような印象を形成するのか、その際に性別要因がどのように関連するのか、今後の検討が必要である。

<過去受容について>

過去受容に関する尺度について見ると、女性においては肯定的自己像高群よりも低群の方が過去を受容している傾向が強かった。これに関連する知見として、久保（2006 a）は、男性では「肯定的自己像保持者」の方が「否定的自己像保持者」よりも、多様な相手に「自分自身の嫌なところ」について話をしている一方、女性ではむしろ「否定的自己像保持者」の方が「肯定的自己像保持者」よりも多様な相手に「自分自身の嫌なところ」について話している可能性を示唆し、男性においては自己像が「否定的」である場合には「自分自身の嫌なところ」を他者に話さないという抑圧的傾向が強まり、一方で女性において自己像が「否定的」である場合でも「自分自身の嫌なところ」をより広汎な相手に話す傾向があると考察している。本研究の結果と合わせて考察すると、女性においては、肯定的自己像の保持の度合いが低い者（久保（2006 a）では「否定的自己像保持者」と表現されている者）の方が過去を受容している傾向が強く、そのため「自分自身の嫌なところ」を抑圧するよりもむしろ広汎な相手に開示するのではないかとと思われる。また、ここから推測されることは、少なくとも女性においては、過去を受容していることは現在の肯定的自己像の保持を保証するものではないということであり、今後は性別要因も考慮に入れた検討が必要になる。

<今後の課題>

本研究の結果から、肯定的な「自己物語」の語用論的機能について考察すると、他者に対して肯定的な自己物語を語ることは、聞き手側の要因により様々な印象が生じるものの、反応の方向性を予測しうる可能性が伺えた。今後は、関連する他の要因の特定が望まれる。さらに、先に述べたように、自己物語を語るとい

う行為自体が自己呈示行為であるため、自己呈示に関連する諸研究の知見を援用し、より実践的で、日常生活場面に近い、いわば「生態学的妥当性」の高い研究方法を探ることが今後は必要となる。心理臨床的援助場面での応用に向けて、更にモデルを精緻化することが今後の課題である。

<謝 辞>

本研究をまとめるにあたり、調査にご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

<文 献>

- 浅野智彦 2001 自己への物語論的接近 家族療法から社会学へ。勁草書房。
- 天貝由美子 1995 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響。教育心理学研究, 43, 364-371.
- Bateson, G. 1972 Steps to an Ecology of Mind. Ballantine. 佐藤良明(訳) 2000 精神の生態学。新思索社。
- Byrne, D. & Nelson, D. 1965 Attraction as a linear function of proportion of positive reinforcements. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 659-663.
- 遠藤由美 1999 「自尊感情」を関係性からとらえ直す。実験社会心理学研究, 39(2), 150-167.
- Gergen, K. J. 1994 Realities and Relationships. Harvard University Press. 永田素彦・深尾誠(訳) 2004 社会構成主義の理論と実践。ナカニシヤ出版。
- Gergen, K. J. 1999 An invitation to social construction. Sage Publications. 東村知子(訳) 2004 あなたへの社会構成主義。ナカニシヤ出版。
- 林文俊 1982 対人認知構造における個人差の測定(Ⅷ)－認知者の自己概念および欲求との関連について。実験社会心理学研究, 22, 1-9.
- 平石賢二 1990 青年期における自己意識の発達に関する研究(Ⅰ)－自己肯定性次元と自己安定性次元の検討。名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 37, 217-234.
- 木下康仁 2003 グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践－質的研究への誘い。弘文堂。
- 久保順也 2006 a 自己の社会的構成に関する一考察－「媒介的自己」概念の提案－。東北大学教育学研究科臨床心理相談室紀要, 4, 53-72.
- 久保順也 2006 b 大学生の「肯定的自己像」の構造と形成プロセスについて－インタビューを題材としたM-GTAによる質的研究－。日本家族心理学会第23

回大会抄録集, 17-18.

- 久保順也 2007 大学生の肯定的自己物語の構造－モデルに基づいた量的分析－。日本家族心理学会第24回大会抄録集, 94-95.
- 水間玲子 1996 自己嫌悪感尺度の作成。教育心理学研究, 44, 296-302.
- 白井利明 1994 時間的展望体験尺度の作成に関する研究。心理学研究, 65, 54-60.
- 若島孔文・佐藤宏平・三澤文紀 2002 家族療法から短期療法、そして物語療法へ。事例で学ぶ家族療法・短期療法・物語療法, 第1章, 1-27.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造。教育心理学研究, 30, 64-68.

(平成20年9月29日受理)